

横浜市小学校社会科研究会 4 学年部会 研修会記録	令和6年 10月2日
	横浜市小学校教育研究会 会長 沼田 留美子 横浜市小学校社会科研究会 会長 高畠 聡 同 学年部長 八木 浩司

【提案日時】 10月 2日 (水)	提案 藤田 秀悟 先生 (田奈小)
【会 場】 横浜市立 平沼小学校	司会 谷川 知栄子 先生 (日枝小)
	記録 柴田 実季 先生 (下郷小)

1 提案内容
 単元名「ごみはどこへ～ごみ有料化は必要？他の市の取り組みから考える横浜市の将来～」

2 提案者より
 本学級では、自ら問いを見出したり、問いに対して考えを書いたりすることが難しい。「水はどこから」の単元では、「水について知れてよかったです。」と深く考えないで振り返っている児童もいた。常に自分事として考えられる機会を設けて、具体的に自分の考えを書けるようにしたい。

視点①
 調査活動から、「なぜ分別しなくてはいけないのか。」という理由について、考えられるようにする。また特に燃やすごみの量が多いことに着目し、これだけの量进行处理するために、どのような取り組みがされているのかについて目が向けられるようにする。
 加えて、横浜市の燃やすごみの量は「減り続けているのに、さらに減らそうとしている。」という事実から、「どうしてさらにごみを減らしていく必要があるのか。」「横浜市民の一人一人が何を知り、何をしなければならないのか。」ということ、主体的に学び、考え、広めていきたいと考えられるように、横浜市の取り組みではなく、日々の生活の様子を振り返りながら、現在の課題について把握できるようにする。

成果：単元が終わった後も、ごみ問題について考え続ける市民へと成長する姿を見ることができた。また、「水はどこから」で学んだ、水を確保するための努力や、市民が水を大切にしようという心がけることの大切さについてが、ごみの学習でも考えの根拠として生かされていた点も、学びの連続性という点で評価できる。

課題：「横浜市のみみんなは分別ができています。」と過信し、児童の課題意識はむしろ、公園のポイ捨てなどに向けられていた。プラスチック包装容器の分別率が60%で課題があることや、「プラ5.3計画」が始まることについては、喫緊の課題ではなく、余裕を持って次のステージに進むかのような雰囲気も児童にあった。データ化と現状の様子について関連付け、考えられるように資料の精選をしたい。

視点②

ごみを減らすために、どのような取り組みがされているのかという点を、一人一人が意識して調べ、そこから分かったことから、共通する理由や、携わる人の想いに考えが向くようにする。一人一人が調べ、考えたことをお互いに比較したり、関連付けたりしながら、学びを深めていく。

成果：資料を事前に読み込む時間をとることで、話し合いのベースとなる知識を得たり、考えをもったりできるようにした。同じ資料を見ながら、一人一人が情報を読み取ることで、気づいたことを伝え合う姿を見ることができた。

課題：資料を読み取ることが難しい児童がいた。声掛けや座席の移動などをさらに進めるとよかった。また視覚化して見やすい資料を提示したり、話し合いの途中で近くの児童と途中経過を確認したりする時間をもとるとよかった。

3 協議会

〈視点②について〉〇本気の学習問題では、本題につながるテーマを設定する。

考えたいことは「ごみの量をどう減らすか。」であるが、「横浜市はごみ袋を有料化するべきかどうか。」を本気の学習問題にしてしまうと、本題の話し合いまでいかない。前時の学習で「どうして横浜市は、ごみ袋を有料化しなくてもよいのか。」と、横浜のごみの減量に向けた現在のよい施策を確認した上で、本気の学習問題を「ほかに、私たちにできることはないのだろうか。」にして、話を進めるのもよかったかもしれない。

〈講師の先生より〉 奈良小学校 宮野雅樹先生

〇体験的な活動を入れるのはマスト

4年生は調査活動がしやすく、身の回りの出来事を学習につなげやすい。自分事としてとらえるきっかけとなる。学年内での協力が大事となる。

〇思考を深める仕掛けづくり

別の自治体を基に、思考を深められていた。話し合いができていたため、一定の成果はあった。また協働的な学びをする際に、共通の資料から調べ学習をするのは、同じ土台から話し合うことができるのでよい。

〇テーマの設定

「さらにごみを減らしていく」ためへの課題意識に対しては、行政と子どもたちの捉え方にずれがあった。このずれを利用して、テーマとして扱うのもよかったかもしれない。

〇14. 15時間目を連続した授業にする（可能であれば）

本時目標に関わる話し合いが後半に出てきている。Mさんの話を聞いてから、本題に入ってきている。「本当は自分たちにできることが、他にあるのではないか。」というところを大事にしたい。プラスチックの分別率が60%であるということ、写真や教室のゴミ箱を実際に見せて、どのくらいの量であるのかを体感させることも必要である。

○本時目標と話し合いの中のずれ

本時目標に準ずるならば、「ごみ袋を有料化すべきかどうか。」がメインではなく、「自分たちができることは何なのか。」ということがメインなるようにしなければならない。実際の活動と本時目標とにずれがあった。また資料を基に話すとしても、資料を読み取れない児童がいる。それらの児童に、教師がその場で対応するのは難しいため、ロイロ等を使用し個別に事前に資料を送ったり、席を工夫したりして、個別の配慮をする必要がある。

○意見を出す子の視点（立場）

子どもは、自分がどの視点で意見を言っているかよく分からずに言っていることもある。行政側の視点でいう子、市民側の視点でいう子が混在し、整理してあげないと、かみ合わない話し合いになる。

○そもそも、国民は税金でごみ処理にお金を払っている

税金で、1日40円程度ゴミ処理に払っていることになる。私たちは、無料でごみを捨てているわけではない。茅ヶ崎市は、市外でごみ処理をしてもらうために、ごみ袋を有料化している。横浜は単純に、「指定のごみ袋がないから、費用は0円」というわけではない。この前提を子どもも知っていたら、また違った話し合いになったかもしれない。

文責 柴田 実季（下郷小学校）